

# 目次

## 序章 協働する「文化工作」

---

6

## 第一章 「外地」の「翼賛一家」——戦時下華北地方・日本統治朝鮮の事例を中心に——

17

- 一 共栄圏に発信されるキャラクター
- 二 「翼賛一家」とはどのような国家宣伝企画だったのか
- 三 華北における「翼賛一家」——漫画集団間の「協働」
- 四 植民地・朝鮮における二つの「翼賛家族」と「国語」教化

## 第二章 満蒙開拓青少年義勇軍と 田河水泡・阪本牙城のまんが教室

---

84

- 一 プロもアマチュアも動員される
- 二 「文化工作」としての外地まんが教室
- 三 読者を戦争に送る——田河水泡と「のらくろ」の戦時動員
- 四 阪本牙城の満洲まんが教室

### 第三章 上海の文化工作者たち——女スパイと芥川賞作家と偽装映画製作者——

- 一 公然化する文化工作者たち
- 二 上海映画工作者と美しき女スパイたち
- 三 感傷と俗情
- 四 「文化工作」としての芥川賞
- 五 「上海の月」と大本営

### 第四章 大東亜共栄圏とユビキタス的情報空間

——アニメ『桃太郎 海の神兵』と柳田國男

- 一 ステルス化するメデイアミックス
- 二 柳田國男と桃太郎南方政策
- 三 「椰子の実」言説の呪縛
- 四 スメル文化圏と南方言説
- 五 ユビキタス化する桃太郎

本文の引用文は原則として、旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いはそのままとした。また、読みやすさを考慮して句読点なども適宜改めた。

## 序章 協働する「文化工作」

本書は戦時下、いわゆる大東亜共栄圏に向けてなされた宣伝工作、いわゆる「文化工作」の具体的な姿を追うものである。特に宣伝工作の中でもまんが・アニメ・映画といった大衆文化における事例を軸に紹介するため「文化工作」の語を中心に用いることにする。

その際、重要なのは、戦時下このような「文化工作」において個別の表現は「作品」ではなく「宣伝」のツールであるということだ。外見は独立したまんがやアニメであっても、大東亜共栄圏の理念なり正当性を主張するプロパガンダを実装する広告であり、それが標語やポスターでなく娯楽作品の形をとったに過ぎない。その点でいえば、アニメやまんがといったおたく文化の海外への発信力に乗せて「日本」をアピールしようとする、ゼロ年代以降から続くクールジャパン政策のさもしい思惑と重なる。クールジャパン政策とは、まんがなどの表現を工作のツールにおとし貶める点で昔も今も変わらない。

さて、その戦時下の「文化工作」の最大の特徴は三つある。

一つめは多メディア展開である。それをメディアミックスと形容することも可能だが、文化工作は作品やメディア単体でなく、新聞、雑誌、ラジオ、ポスターといったメディア様式、映画、まんが、アニメ、演劇など、その時点で存在した多様な表現領域を超えて同時多発的に行われるということが特徴的だ。だからこそ、もう一度念を押すが、それらが現在のメディアミックスと違うのは、一つ一つが「作品」でなく「プロパガンダ」を伝達することが目的のツールである点だ。

二つめは、そのプロパガンダには「内地」に向けたものと、「外地」あるいは領地や国際社会に向けたものの二種類があり、それぞれ語られ方が異なるということだ。地域ごとの統治政策や政治的、社会的背景に応じてローカライズされることもしばしばある。

三つめは官民、そして何よりプロとアマチュア（戦時下は「素人」と呼ばれた）の垣根を越えた共同作業であることだ。この官民を軍や翼賛会が主導し、アマチュアが能動的に文化工作に参加する。このような創造的行為における共同作業を翼賛体制用語で「協働」と呼ぶ。大政翼賛会が「上意下達」でなく「下意上達」をするように、戦時下のファシズムはこのような「参加型」の文化創造運動としての側面がある。この「協働」は「協同」とも記すが、その出自は

大政翼賛会を主導した近衛文麿このえかみまろのシンクタンクである昭和会の提唱した協同主義にある。

実践の根本的規定は、ものを作るといふことである。それが如何なるものであれ、政治上の制度の如きものであれ、経済生活の物資の如きものであれ、更に文化財の如きものであれ、ものを作るといふことが実践の本来の意味である。(昭和研究会編『新日本の思想原理・協同主義の哲学的基礎・協同主義の経済倫理』生活社、一九四一年)

このような文化を含む翼賛体制構築のための実践の基本原理が「協働」なのである。

その意味で「協働」は翼賛体制の本質を示す語でもあるといえる。この「協働」は多メディア間の連動、すなわちメディアアミックスを連想させると同時に、共栄圏構築における「協和」が目的である。戦時下の「文化工作」は「協働」という語に収斂しゅうれんされるにふさわしい。

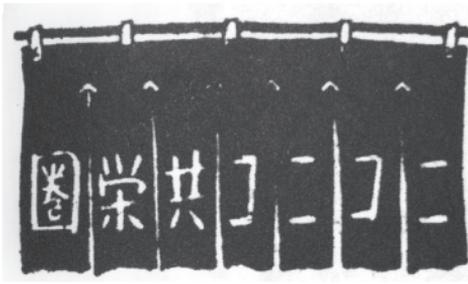
と記すと本書はあたかも文化の「協働」的なあり方を賛美するかのように聞こえるかもしれないが、無論そうではない。ゼロ年代以降、「協働」の語は一方ではニコニコ動画を始めとするオンライン産業内部で、他方ではクールジャパンの文脈で礼賛される同人誌文化などを形容する官僚用語として、実は広汎に使われてきた。その戦時用語のさり気ない現在における復興

に、当然だがぼくは危惧を覚える。それゆえに「文化工作」と「協働」とを対にして、戦時下の対外プロパガンダをめぐる本書の副題に冠することで、その復興に見え隠れする政治性に注意を喚起したいと考える。

それが本書の書名『大東亜共栄圏のクールジャパン——「協働」する文化工作』の由来でもある。

ところでこのような戦時下の対外的な文化工作を特徴的に示す語として、もう一つ、書名には採用しなかったが「ニコニコ共栄圏」なる奇怪な語がある。まるでドワンゴのニコニコ動画がそのイベントなどで不用意に用いそうな造語のようにも思えるが、歴史とした戦時下用語である。

戦時下、「ニコニコ共栄圏」の語は「内地」でなく「外地」であった台湾の新聞の見出しで見つけることができる(図1)。広く使われたものではないが、台湾での大政翼賛会に相当する皇民報国会が皇民化運動の一つとして一九四二年に行ったメディア横断型の宣伝活動「ニコニコ運動」に呼応したコラムの見出しに確



【図1】 ニコニコ共栄圏アイコン (齋藤總務長官「笑へ笑へ」『台湾日日新報』昭和十七年九月七日)

認  
で  
き  
る。

その「ニコニコ運動」の概要は報国会の文書にこうある。

長期戦を断乎戦ひ貫くためには銃後に於て明朗潤達各職域に精励することが絶対必要である。茲に於て本会は「笑つて翼賛台湾一家」をモットーにニコニコ運動を提唱し九月一箇月を該運動期間として十月以降も本運動の眞精神を持続しニコニコを日常生活化せしむる様指導することとし皇民奉公会中央本部及各支部を中心に各官庁、新聞社、放送局、興業統制会社、全日本写真連盟台湾支部等の前面協力を得て全島民に協力を運動を展開した処、時局下「笑ひ」を要求せる様の関係もあり、期せずして大なる効果を収めることが出来た。

(皇国奉公会中央本部編「第二年目における皇民報告運動の実績」一九四三年)

大東亜共栄圏とはそもそも「家族」、すなわち「一家」を単位とし、それが数戸からなる「隣組」も「一家」と比喩される。そしてその上の行政単位の「町内」から「内地」までもが「一家」、そこに日本統治下の台湾や朝鮮も「一家」となり、八紘一宇はつこういちゆうという入れ子構造の「一家」を構成するというイメージである。引用した文書では「ニコニコ」する目的が「長期戦を

断乎戦ひ貫くため」とあるが、その主眼は「台湾一家」を「笑ひ」を以て形成することにある。台湾はいわゆる先住民族（現在は「原住民」と表記される）、清朝統治時代に移住した中国系移民、そして日本統治下における「内地」からの移住者からなる。実際には台湾「原・住民」は日本統治時代で七族に分類され、現在では台湾政府認定に限っても十六民族からなっているが、認定外の部族も多数存在する。それ自体が多様性をはらむものだ。

しかし満洲国において「五族協和」を掲げ、中国大陸だけでなく南方へとそれを拡大し、共栄圏全体を「一家」とする国策化において、台湾における「三族」の「協和」はそのモデルケースであった。そもそも先住民族と中国系住民との間には清朝から引き継いだ対立構造があり、差別と軍事衝突が繰り返された歴史がある。それを「ニコニコ」笑って解消しようという何とも勝手な運動だが、『笑顔で翼賛、台湾一家』の標語を以て作製せる（同前）大小のポスター三万枚が台湾中に貼り出され、「ラジオ放送、演劇、映画、壁新聞、千社礼式貼札（いつもニコニコ親切、丁寧）その他胸部佩用マーク、紙芝居、スライド、漫画、写真展覧会、標語普及、講演、訓話等あらゆる方法に依り」（同前）あらゆる場・メディアに「ニコニコ」の文字が躍った。そうやって「ニコニコ」の文字が、本書第四章で述べる戦時下のメディアミックスの最大の特長であるユビキタス（遍在化）として演出された。しかもその「ニコニコ」は、最後は



【図2】 ニコニコ運動記事。齋藤總務長官「笑へ笑へ」『台湾日日新報』（1942年9月9日）

いわゆる高砂義勇兵として「死の直前にニッコリ笑つて万歳を叫ぶ」ことにすり替わる。

その発言をしたのが当時の皇民報国会中央本部長・齋藤樹である。「台湾日日新報」紙上での「笑へ笑

へ」という連続インタビューにおいてだった（図2）。このインタビューは『三族』、男女、さまざまな職域の人々の「ニコニコ」運動を紹介する「協和」記事で、総督府トップである総督長谷川譲も市井の人の一人に交じり登場するという演出である。「ニコニコ運動」が官民一体そして先住民・中国系住民・内地からの移住者の「三族」の「協働」を意味することがわかるだろう。

しかし齋藤だけは、あからさまに先の本音を述べたのである。そして、その記事に「笑へ笑へ」のタイトルとは別に添えられたのが「ニコニコ共栄圏」のロゴなのである。

この「ニコニコ」に限らず「朗らか」「愉快」、あるいはこの「ニコニコ運動」自体が内地の「笑話運動」に呼応するものだが、本書で扱う事例に限らず、戦時下の大衆文化では官製の「笑い」が強要される。ほくは二〇二二年三月に刊行した『暮し』のファシズム―戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた（筑摩書房）で翼賛体制下、まるでコロナ下の自粛生活のように「日常」の更新や「生活」の新体制がプロパガンダされることを強調したが、「ニコニコ」や「朗らか」はそのような「日常」記述の作法の一つとして「銃後」のみならず戦地にさえ求められた。だから本書では踏み込まないが、映画においても喜劇映画が戦時下、隆盛もするのである。

そしてもう一つ、戦時下の文化工作の大きな特徴は「文化工作」そのものの公然化である。本書でも改めて扱う戦時下の文化工作ツール「翼賛一家」でも隣組や町内を扱うまんがの中に「防諜」の語が頻出する。小説版「翼賛一家」でも一家がスパイを摘発するエピソードがあるし、「翼賛一家」も登場するアニメ、山本早苗作画・演出「スパイ撃滅」（三幸商会、一九四二年）は、どこかの町内に連合国からのスパイが潜入するところから物語が始まる（図3）。

このように諜報員や工作員が跋扈する「日常」を翼賛体制はデザインしたといえる。

翻って現在を見た時、一方ではオカルト雑誌の定番に近い陰謀論とそれに伴う「工作」がオ



【図3】 日常を跋扈する役員たち。山本早苗「スパイ撃滅」(1942年)

オンライン上ではまことしやかに語られ、配偶者や父母が陰謀論にハマってしまったという冗談のような訴えを人生相談の類いで幾度となく側聞もした。北米のドラマ『Xファイル』もどきの影の政府による陰謀説を唱えるQアノンがトランプ政権下で一定の政治力を得てしまうという笑えぬ事態も起きているが、日本でも限定的な意味での「保守」系政治家や団体に真顔で陰謀論を唱える人々が相応にいる。

その一方で dappi や choose life project などのオンラインを通して、自民党も立憲民主党も文化工作として安易にネット上のプロパガンダを外注する。また政治には無縁の YouTuber 格闘家シバターは、二〇二一年末の格闘技イベント「RIZIN」でSNSで試合の段取りを「工作」した上に、それを暴露し合う。このように今の日本でも文化工作の「案件」化、カジュアル化という事態が起きている。元首相が隣国との「歴史戦」を煽り、報道機関が呼応しSNS上の投稿へと拡大していくさまは文化工作の「協働」そのものである。つまり、「文化工作」がどこにでも、ある日常が復興しているのだ。

ここまで読んで、お前は以前『大政翼賛会のメディアミックス―「翼賛一家」と参加するファシズム』（平凡社、二〇一八年）で「メディアミックス」の戦時下起源を語り、前述の『暮らし』のファシズム』ではコロナ禍の「日常」や「生活」が戦時下起源だと主張し、つい今し方「協働」の出自も昭和会といった口で、今度は「文化工作」の氾濫も戦時下と同じだと匂わせる。つまりは、無闇に何でも戦時下にこじつけているだけではないかと憤る読者諸氏もおられるだろう。しかし、全てが戦時下に連なるというのはある意味では正しい。ほくは戦後から現在に至る生活や政治や文化のあり方が戦時下を基調としていて、その表層をお色直し、コーティングしてきた戦後民主主義が衰退して剝離することで、戦時下の様相が復興したと考える。そして、そもそも戦時下に設計されたそれらの文化創造や政治参加のあり方は良くも悪くも（私見ではより悪く）SNSやオンラインと整合性が高いとも考えられるのだ。

だから本書もまた、ほくは戦時下の「協働する文化工作」をめぐる諸相を「現在」への極めてベタな批評として語ることにする。その際、歴史を記述する作法として「文化工作」や「歴史戦」がカジュアル化した世相に冷静な距離をとる意味で極力、一次資料を参照したことは付記しておきたい。

そしてほくがまんが表現を中心にアニメや映画など、メディア産業における「文化工作」に

ついて語るのは、それは自分が今もその現場の片隅で作者として生きるからに他ならない。一体、自分の立ち位置や来歴を批判的に疑う以外に私たちは歴史を学ぶ意味があるのか。

それでは始めよう。